

インド福祉村協会

思いやりと献身の医療 ～Care with Compassion and Commitment～

ウッタル・プラデーシュ州東部、クシナガル郡シルシア村にあるアーナンダ病院は、住民への保健衛生の啓蒙に成功しています。JICA の支援を受けて、この病院は貧困層に初期医療サービスを提供しています。

～行動は言葉より説得力がある～ 何かを伝える時、“言葉にする” 必要はなく、“行動すること” がメッセージを伝えるものだ

これを実践しているのは、インド福祉村協会のコーディネーターである大竹紘一さんです。大竹さんは毎年、日本からインドへ足を運び、アーナンダ病院の仕事を手伝っています。



UP 州クシナガル、シルシア村のアーナンダ病院（写真：OWSA 提供）

大竹さんは薬剤師。片言の英語と少しのヒンディー語の単語を使って、治療にやって来た病院の患者と驚くほど上手くコミュニケーションを取ることができます。

アーナンダ病院は、貧困層がアクセスできる医療サービスの提供と、公衆衛生意識の普及による感染症予防を目的として、日本からの支援で 1998 年に建てられた病院です。愛知県を拠点に活動する NGO、インド福祉村協会がインドの NGO であるアーナンダ・ミッション・チャリタブル・トラストと共同で運営しています。

大竹さんは病院建設当初からアーナンダ病院に関わってきました。



近隣村の住民と話す大竹氏
（写真：OWSA 提供）

過去 12 年に渡って、少なくとも年に 2 回はアーナンダ病院を訪れています。アーナンダ病院を基点に近隣の村々を訪問し、彼らの健康状態を尋ねて歩き回ります。日本語、英語、ヒンディー語に身振り手振りを混ぜて話す大竹さんを、村の人は親しみを込めて「タケ・ババ（タケおじさん）」と呼んでいます。

心からの関心と親しみがあれば、言葉の違いは決して大きな壁にはならないことを大竹さんは証明しています。こういった努力によって、大竹さんはアーナンダ病院を支える柱のような存在となっています。

病院にとってのもうひとつの柱は、病院長のグプタ医師です。彼は、都会での快適な暮らしよりも困難が伴う村での仕事を敢えて選択した、数少ない医師の一人です。

グプタ医師は、1998年11月2日の開院以来、ずっとアーナンダ病院で医師として勤務してきました。当時は、机と2脚の椅子以外には何もない状態で始まったアーナンダ病院ですが、今では検査室、レントゲン装置、心電図、超音波検査装置、7床の病室という設備を備えています。



アーナンダ病院の
グプタ院長
(写真：OWSA 提供)

病院を私達に案内しながら、開院以来少しずつ設備が整ってきた過程を話してくれる様子は誇らしげで、グプタ医師がこの仕事に満足感を持っていることが感じられました。

病院は、大竹さんの監督の下で1997年に建設が始まり、1年後に完成しました。日本では、建物の完成時期は建設が始まる前に決定されますが、インドではそうはいきません。しかし、アーナンダ病院は1998年11月に診療を開始すると決定し、それに従って（驚くべきことに）全くその通りの日程で建設が終了したのです。大竹さんは一年の半分以上の200日をインドで過ごし、予定通りに建設を終えるため、作業員たちと一緒にレンガを積み上げ、セメントを塗るといった作業に加わりました。インドにおいては、日本的な規律や勤労、時間厳守の感覚には驚かざるを得ません。



妊婦保健衛生教室の病院アシスタントと参加者の女性たち
(写真：OWSA 提供)

アーナンダ病院は開院以来20万人以上の患者の診察を行ってきましたが、患者は近隣の村からだけではなく、ウッタル・プラデーシュ州とビハール州の州境の辺りからもやってきます。一番多い診療内容は、熱帯病と呼ばれる、赤痢、マラリア、ウィルス感染症、結核、喘息、寄生虫病といった病気です。

この地域で蔓延している感染症は、公衆衛生に関する知識があれば予防できる病気ばかりです。アーナンダ病院は、JICAの支援を受けて“北インド農村部への保健衛生教育と人材育成”という事業を実施しており、近隣村の人々への公衆衛生教育に力を入れています。

アーナンダ病院を訪れる患者の半分以上が女性であり、その多くは妊婦です。JICA の支援事業では、病院内で毎週 1 回の妊婦保健衛生教室を開いており、病院のアシスタントとして働く女性 2 名、スマンさんとウルミラさんが講義を行っています。

講師が女性なので、参加者の女性達は自由に質問をしたり、自身の抱える問題を話し合うことができます。また、講師は地元の方言で話すため、参加者は内容をよく理解することができます。

毎週金曜日には 20~30 名の女性が教室に参加し、母子保健、安全な妊娠、出産、健康管理と栄養、育児といった、基本的な健康や衛生に関する情報が提供されています。

毎日約 80~130 名の患者がアーナンダ病院にやってきますが、その大半は経済的に社会の底辺に属する低階層の人たちです。何人かの村人と話したところ、誰もが病院の存在は彼らにとって非常に大きな利益である、と意見でした。病院によって恩恵を受けるのは、社会から取り残された人々ターダリット（不可触民）や後進カーストの人々です。彼らは今でも上位カーストの人々よりも低い生活水準に置かれています。



毎日約 80~130 名の患者が
アーナンダ病院を訪れる
(写真：OWSA 提供)

「村に病院があって助かっています。この病院がなければ、ゴラクプルや他の地域の病院まで治療に通わなければなりません。この村の住民は高い治療費を捻出できるほどの経済的余裕はありません。」と、クムタ村からの患者、ウマ・シャンカールさんは話してくれました。

アーナンダ病院に初めて来たという患者は、ここで治療を受けて回復した人の話を聞いてやってきたと言います。それだけでなく、病院でかかる費用は登録料、検査費用、薬代のみであり、他の病院に比べて費用が安いのが特徴です。

また、アーナンダ病院では、HIV 感染の疑いがある患者に対して一次検査を行っています。病院には HIV 検査の設備があり、ELISA テスト（HIV 抗体検査）は通常の 3 分の 1 の費用で受けることができます。これまで 100 件近い検査がこの病院で行われましたが、HIV/AIDS の大流行の防止に多大な貢献をしています。

アーナンダ病院が良質の薬を保有し、患者にとって負担の少ない価格で処方しているという実事は、特筆されるべき点です。この点については、患者だけではなく近隣の病院においても認識されており、カシア地区のコミュニティー・ヘルス・センター（地区病院）を訪問した際には、専門家からアーナンダ病院が保有している薬の品質について言及があったことに驚かされました。

初めてアーナンダ病院へ来たという、メヘルニシャさんは、「以前はコミュニティー・ヘルス・センター（地区病院）で治療を受けていましたが、アーナンダ病院で処方される薬のおかげで病気から回復したという話を聞き、ここへやって来ました。」と語ってくれました。

「この病院ではいい薬を処方してもらえます。」と、これまで3~4回病院に来たことがあるというビッキーさんは話します。「薬が病気に対して効き目があれば、また患者がこの病院にやって来るのは当然のことです。薬のおかげで回復し、それが安価であるから、またこの病院へやって来るのです。」



患者に負担の少ない価格で薬が提供される
（写真：OWSA 提供）

インドと日本の協力によって始められたアーナンダ病院は、今日では、農村地域で提供される初期医療サービスの成功例として位置づけることができます。他の地域においても多くの団体がアーナンダ病院をモデルとして医療を提供し始めれば、インドの農村地域における初期医療インフラが強化されることでしょう。